報道発表

National Institution For Youth Education
独立行政法人 国立青少年教育振興機構

平成22年 10 月 14 日

子どもの頃の体験は，その後の人生に影響する

「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」報告書

国立青少年教育振興機構では，幼児期から義務教育修了までの各年齢期における多様な体験（以下，「子どもの頃の体験」という）とそれを通じて得られる資質・能力（以下，「体験の力」という）の関係性を把握し，学校や地域，家庭において，どの年齢期にどういった体験が重要になるのかを明らかにするため，青少年の発達段階に応じた適切かつ効果的な体験活動の推進に関する調査研究を実施しました。中間報告に続いて，新たに分析した結果を含めて調査結果を御報告させていただきます。

＜主な調査結果（青少年調査）＞

青少年調査結果①　幼少期から中学生期までの体験が多い高校生ほど，思いやり，やる気，人間関係能力等の資質・能力が高い。

■幼少期から中学生期までに「動植物とのかかわり」，「地域活動」，「家事手伝い」等の体験が豊富な高校生ほど，「友達がとても幸せな体験をしたことを知ったら，私までうれしくなる」といった「共生感」，「経験したことのないことには何でもチャレンジしてみたい」といった「意欲・関心」，「けんかをした友達を仲直りさせることができる」といった「人間関係能力」が高い(p.1)。

青少年調査結果②　小学校低学年までは友達や動植物とのかかわり，小学校高学年から中学生までは地域や家族とのかかわりが大切。

■高校 2 年生の結果から，各年齢期において「体験の力」との関係が見られた体験は以下のとおりである(p.2)。
・小学校低学年までは「友だちとの遊び」「動植物とのかかわり」等
・小学校高学年から中学校までは「地域活動」や「家事手伝い」，「家族行事」，「自然体験」等

青少年調査結果③　体験が豊富な子どもほど，携帯電話を持っている・読む本の冊数が多い，という割合が高い。また，コンピューターゲームやテレビゲーム遊びをしない，という割合が高い。

■幼少期から現在までの体験が豊富な子どもほど，携帯電話を所持する割合が高く，1 ヶ月に読む本の冊数が多くなる傾向がみられる(p.3-4)。
■幼少期から現在までの体験が豊富な子どもほど，コンピューターやテレビゲーム等のゲーム遊びの頻度が少ないという傾向がみられる(p.5)。

青少年調査結果④　幼少期から小学生期までの「自然体験」，「動植物とのかかわり」，「友だちとの遊び」は，高校生より中学生の方が少ない。
幼少期から小学生期までの「家族行事」は，高校生より中学生の方が多い。

■「海や川で貝を採ったり魚を釣ったりしたこと」といった「自然体験」，「野鳥を見たり，鳴く声を聞いたこと」といった「動植物とのかかわり」，「かくれんぼや缶けりをしたこと」といった「友だちとの遊び」を小学生までに体験している割合は，中学 2 年生よりも高校 2 年生が多い。一方，「家族の誕生日を祝ったこと」といった「家族行事」を小学生までに体験している割合は，中学 2 年生よりも高校 2 年生の方が少ない(p.6)。

裏面もご覧ください。

＜主な調査結果（成人調査）＞

成人調査結果①　子どもの頃の体験が豊富な大人ほど，やる気や生きがいを持っている人が多く，モラルや人間関係能力が高い人が多い。

■子どもの頃の「自然体験」や「友だちとの遊び」，「地域活動」等の体験が豊富な人ほど，「経験したことのないことには何でもチャレンジしてみたい」といった「意欲・関心」や，「電車やバスに乗ったときお年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う」といった「規範意識」，「友達に相談されることがよくある」といった「人間関係能力」が高い（p.7）。

成人調査結果②　成人の結果においても，小学校低学年までは友達や動植物とのかかわり，小学校高学年から中学生までは地域や家族とのかかわりが大切。

■各年齢期において「体験の力」との関係が見られた体験は以下のとおりである(p.8)。
・小学校低学年までは「友だちとの遊び」「動植物とのかかわり」等
・小学校高学年から中学校までは「地域活動」や「家事手伝い」，「家族行事」，「自然体験」等

成人調査結果③　子どもの頃の体験が豊富な大人ほど，「丁寧な言葉を使うことができる」といった，日本文化としての作法・教養が高い。

■子どもの頃の体験が豊富な人ほど，「丁寧な言葉を使うことができる」といった「文化的作法・教養」が高い。そして，「文化的作法・教養」5 項目は，体験の6つのカテゴリ※すべてと幅広く関係している(p.9)。
※体験のカテゴリ:「自然体験」・「動植物とのかかわり」・「友だちとの遊び」・「地域活動」・「家族行事」・「家事手伝い」

成人調査結果④　子どもの頃の体験が豊富な大人ほど，学歴が高い・収入が多い・読む本の冊数が多い・結婚している・子どもの数が多い，という割合が高い。

■子どもの頃の体験が豊富な人ほど，最終学歴が「大学や大学院」と回答した割合が高く，その他，現在の年収が高かったり，1ヶ月に読む本の冊数が多くなる(p.10)傾向がみられる。
■子どもの頃の体験が少ない群より多い群の方が，結婚している割合が高い。さらに，子どもが 2 人以上いると回答した割合が高い(p.11)。

成人調査結果⑤自然体験や友だちと遊ぶ体験は若い世代ほど少ない。幼少期の家族行事の体験は若い世代ほど増えている。

■「夜空いっぱいに輝く星をゆっくり見たこと」といった「自然体験」，「すもうやおしくらまんじゅうをしたこと」といった「友だちとの遊び」が若い世代ほど少ない。一方，幼少期での「家族の誕生日を祝ったこと」といった「家族行事」は若い世代ほど増えている(p.12)。

成人調査結果⑥「規範意識」，「人間関係能力」，「職業意識」，「文化的作法・教養」は，世代が上がるほど高まる。

■「お年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う」といった「規範意識」，「友達に相談されることがよくある」といった「人間関係能力」，「できれば，社会や人のためになる仕事をしたいと思う」といった「職業意識」等の「体験の力」は，年代が上がるほど，得点が高くなる傾向がみられる(p.13)。

【お問い合わせ】
独立行政法人国立青少年教育振興機構総務企画部調査研究・広報課　研究員　中村
〒151-0052　東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号
[TEL]03-6407-7742（直通）[FAX]03-6407-7689

◇ 幼少期から中学生期までの体験が多い高校生ほど，思いやり，やる気，人間関係能力等の資質･能力が高い。

【青少年調査（高 2 結果）】

高校 2 年生の結果を用いクロス集計を行ったところ，幼少期から中学生期までに「動植物とのかかわり」，「地域活動」，「家事手伝い」等の体験が豊富な高校生ほど，「友達がとても幸せな体験をしたことを知ったら，私までうれしくなる」といった「共生感」，「経験したことのないことには何でもチャレンジしてみたい」といった「意欲・関心」，「けんかをした友達を仲直りさせることができる」といった「人間関係能力」が高い。

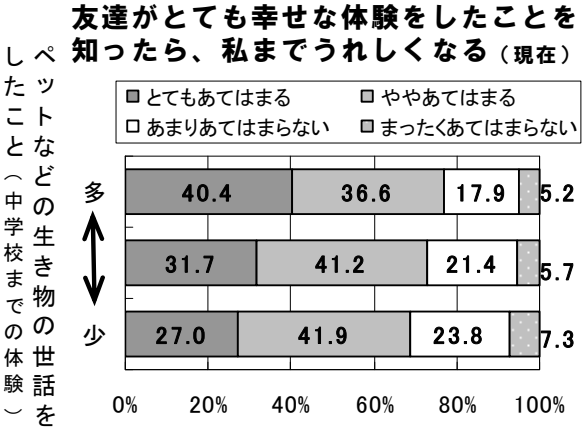


図 4-3-①-8

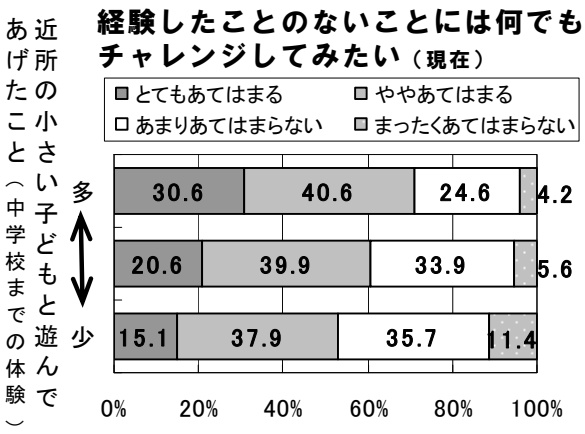


図 4-3-①-16

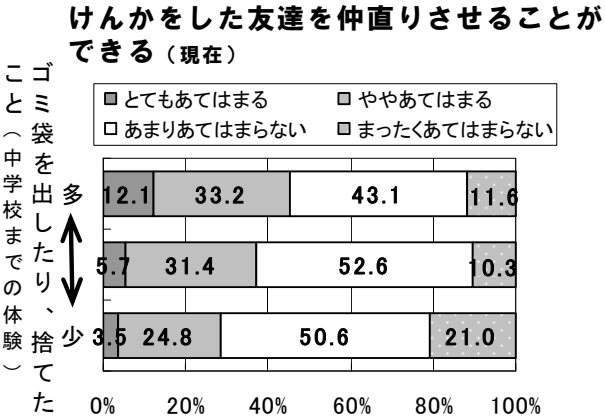


図 4-3-①-33

［共生感］
- 休みの日は自然の中で過ごすことが好きである
- 動物園や水族館などに行くのが好きである
- 悲しい体験をした人の話を聞くとつらくなる
- 友達がとても幸せな体験をしたことを知ったら，私までうれしくなる
- 人から無視されている人のことが心配になる

［意欲・関心］
- もっと深く学んでみたいことがある
- なんでも最後までやり遂げたい
- 経験したことのないことには何でもチャレンジしてみたい
- 分からないことはそのままにしないで調べたい
- いろいろな国に行ってみたい

［人間関係能力］
- 人前でも緊張せずに自己紹介ができる
- けんかをした友達を仲直りさせることができる
- 近所の人に挨拶ができる
- 初めて会った人とでもすぐに話ができる
- 友達に相談されることがよくある

◇ 小学校低学年までは友達や動植物とのかかわり，小学校高学年から中学生までは地域や家族とのかかわりが大切。

【青少年調査（高 2 結果）】

高校 2 年生の結果を用い，子どもの頃の体験と「体験の力」の関係を分析（重回帰分析）したところ，小学校低学年までは「友だちとの遊び」「動植物とのかかわり」等の体験が，「体験の力」とより関係している。そして，小学校高学年から中学生までは「地域活動」「家族行事」「家事手伝い」「自然体験」等の体験が「体験の力」とより関係している。 なお，この結果は，成人調査と類似している(p.8)。

表 4-3-②. 年齢期別「体験の力」との関係が見られる体験

体験の力	年齢期			
	小学校に通う前	小学校低学年	小学校高学年	中学校
自尊感情		友だちとの遊び	家事手伝い	地域活動 家族行事
共生感		友だちとの遊び 動植物とのかかわり 地域活動		自然体験 地域活動 家族行事 家事手伝い
意欲・関心		友だちとの遊び 動植物とのかかわり		地域活動 家事手伝い
規範意識	友だちとの遊び 家族行事	友だちとの遊び 動植物とのかかわり	家事手伝い	自然体験 地域活動 家族行事
職業意識			動植物とのかかわり	自然体験 地域活動 家族行事
人間関係能力		友だちとの遊び		自然体験 友だちとの遊び 地域活動 家族行事
文化的作法・教養		家族行事	動植物とのかかわり	地域活動 家族行事 家事手伝い

◇ 関係が見られる各年齢期における体験と「体験の力」の関係についてのクロス集計結果の例

〔小学校に通う前〕

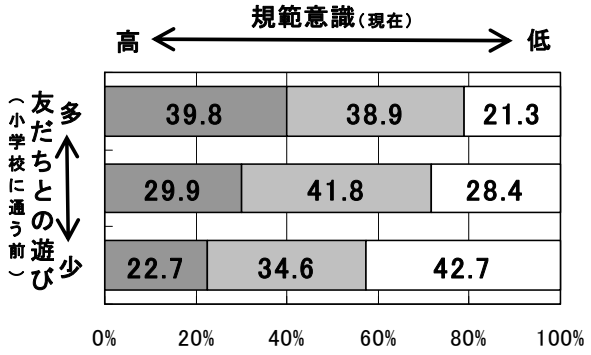


図 4-3-②-1 小学校に通う前の「友だちとの遊び」と「規範意識」の関係

〔小学校高学年〕

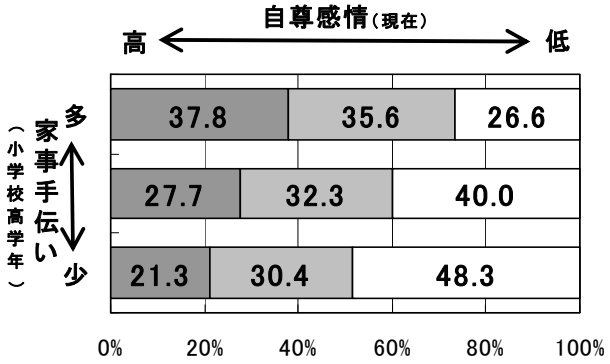


図 4-3-②-13 小学校高学年の「家事手伝い」と「自尊感情」の関係

◇体験が豊富な子どもほど，携帯電話を持っている・読む本の冊数が多い，という割合が高い。また，コンピューターゲームやテレビゲーム遊びをしない，という割合が高い。

【青少年調査】

クロス集計の結果，幼少期から現在までの体験が豊富な子どもほど，携帯電話を所持する割合が高く，1ヶ月に読む本の冊数が多くなる傾向がみられる。

携帯電話を持っている子どもの割合

〔小学校 5 年生〕

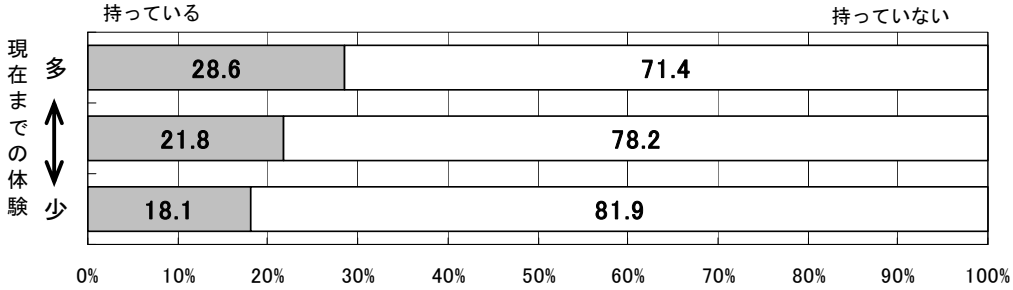


図 4-5-①-1

〔小学校 6 年生〕

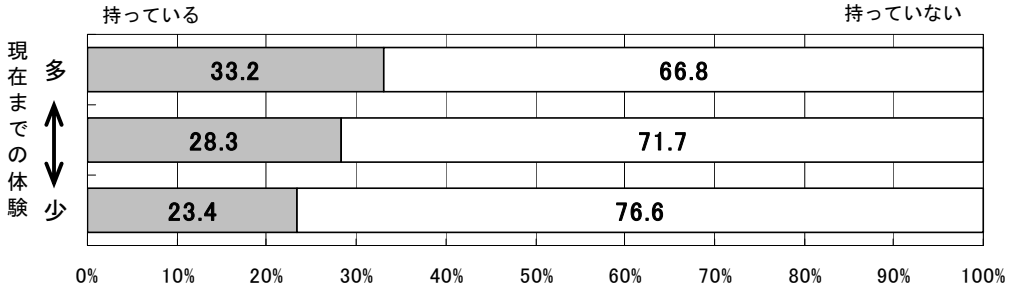


図 4-5-①-2

〔中学 2 年生〕

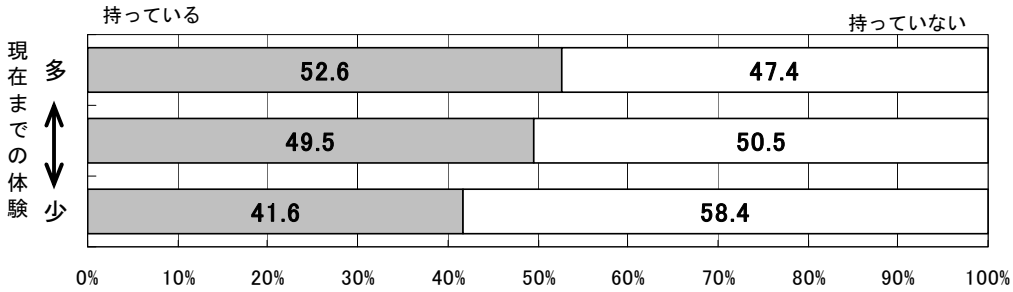


図 4-5-①-3

〔高校 2 年生〕

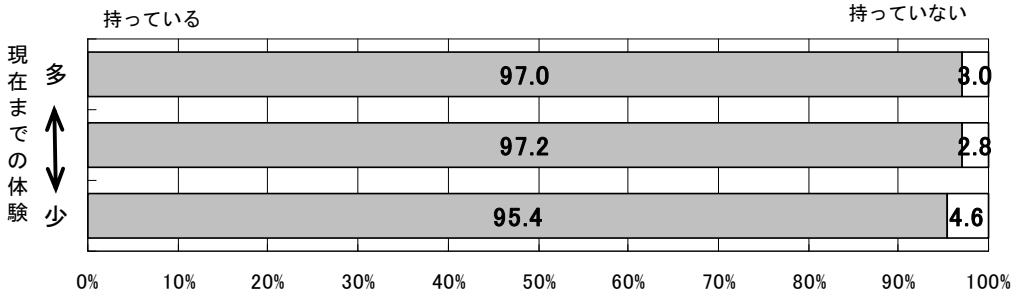


図 4-5-①-4

1ヶ月に読む本の冊数

〔小学校５年生〕

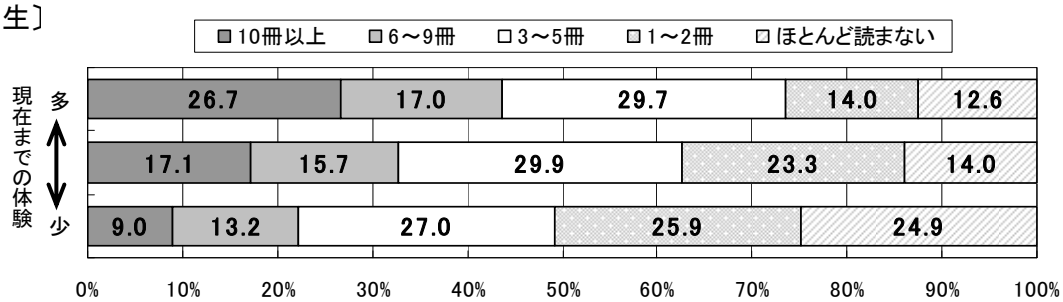


図 4-5-②-1

〔小学校６年生〕

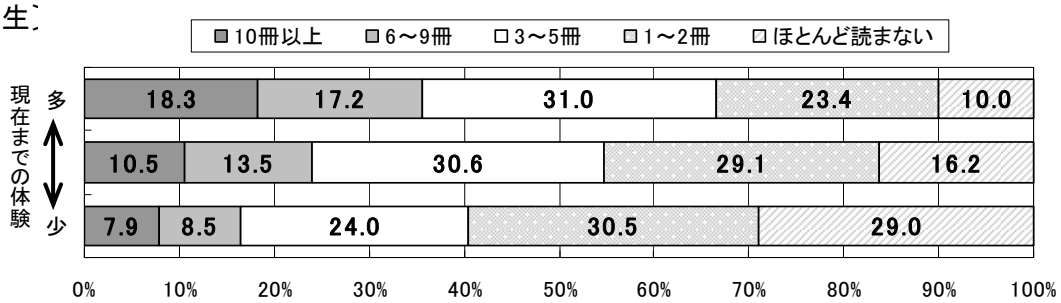


図 4-5-②-2

〔中学２年生〕

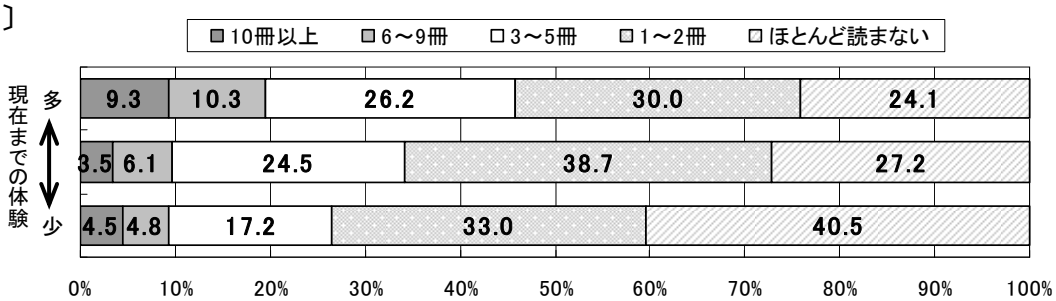


図 4-5-②-3

〔高校２年生〕

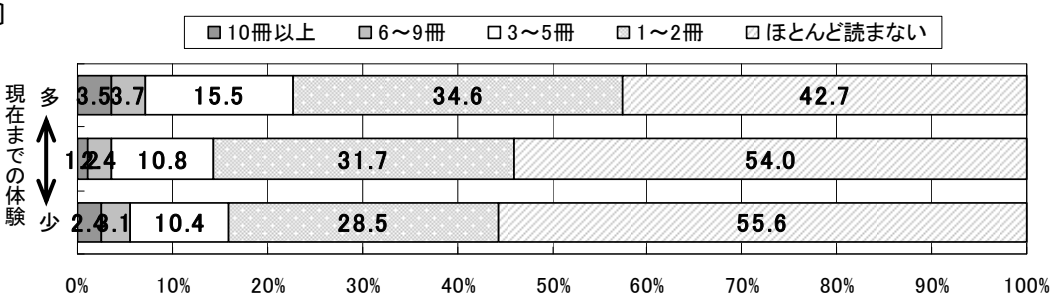


図 4-5-②-4

クロス集計の結果，幼少期から現在までの体験が豊富な子どもほど，コンピューターやテレビゲーム等のゲーム遊びの頻度が少ないという傾向がみられる。

コンピューターゲームやテレビゲーム遊びの頻度

〔小学校 5 年生〕

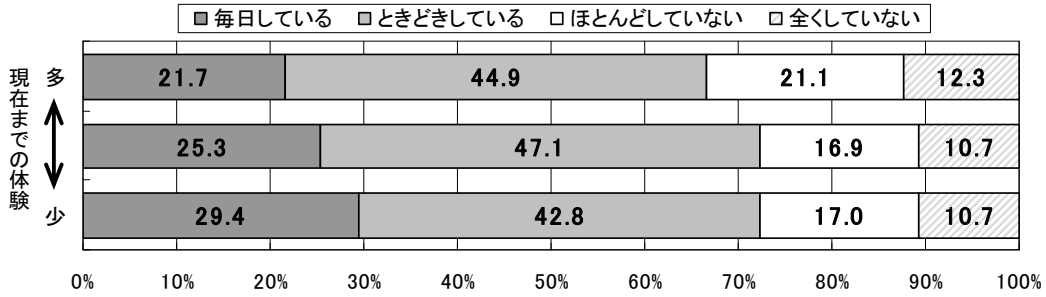


図 4-5-③-1

〔小学校 6 年生〕

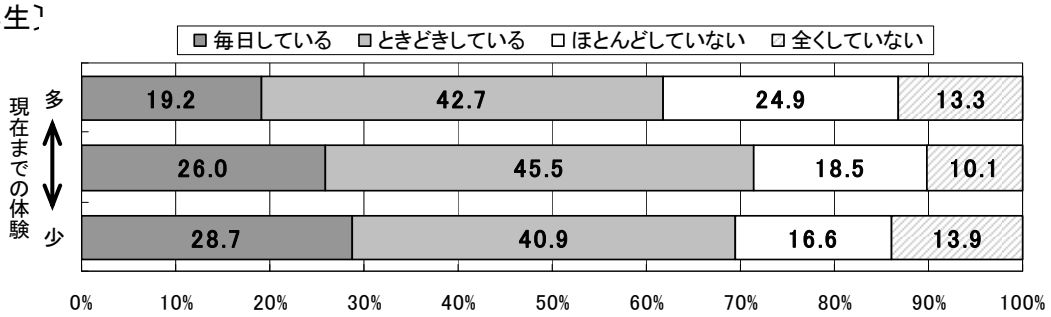


図 4-5-③-2

〔中学 2 年生〕

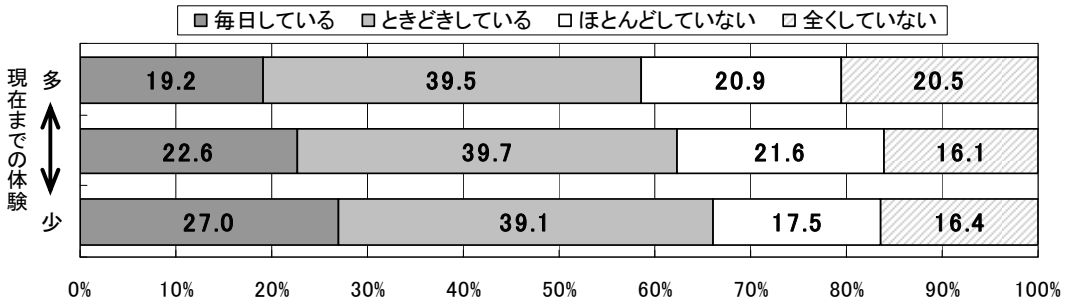


図 4-5-③-3

〔高校 2 年生〕

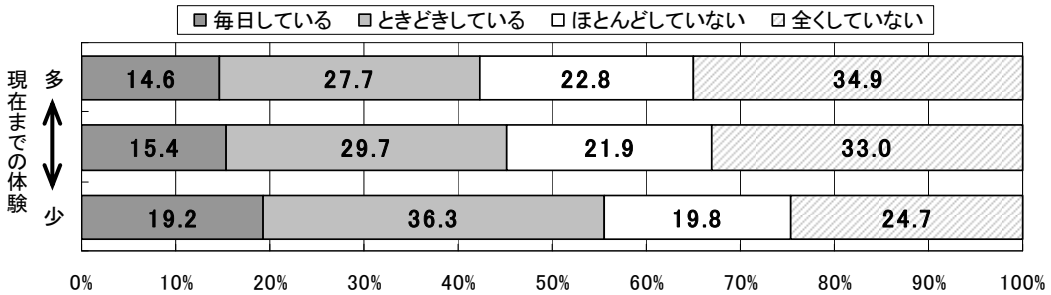


図 4-5-③-4

◇ 幼少期から小学生期までの「自然体験」,「動植物とのかかわり」,「友だちとの遊び」は，高校生より中学生の方が少ない。
◇ 幼少期から小学生期までの「家族行事」は高校生より中学生の方が多い。

【青少年調査（中 2・高 2 結果）】

「海や川で貝を採ったり魚を釣ったりしたこと」といった「自然体験」,「野鳥を見たり，鳴く声を聞いたこと」といった「動植物とのかかわり」,「かくれんぼや缶けりをしたこと」といった「友だちとの遊び」は，中学 2 年生の方が，高校 2 年生よりも小学生までに体験している割合が減っている。一方,「家族の誕生日を祝ったこと」といった「家族行事」は中学 2 年生の方が，高校 2 年生よりも小学生までに体験している割合が増えている。

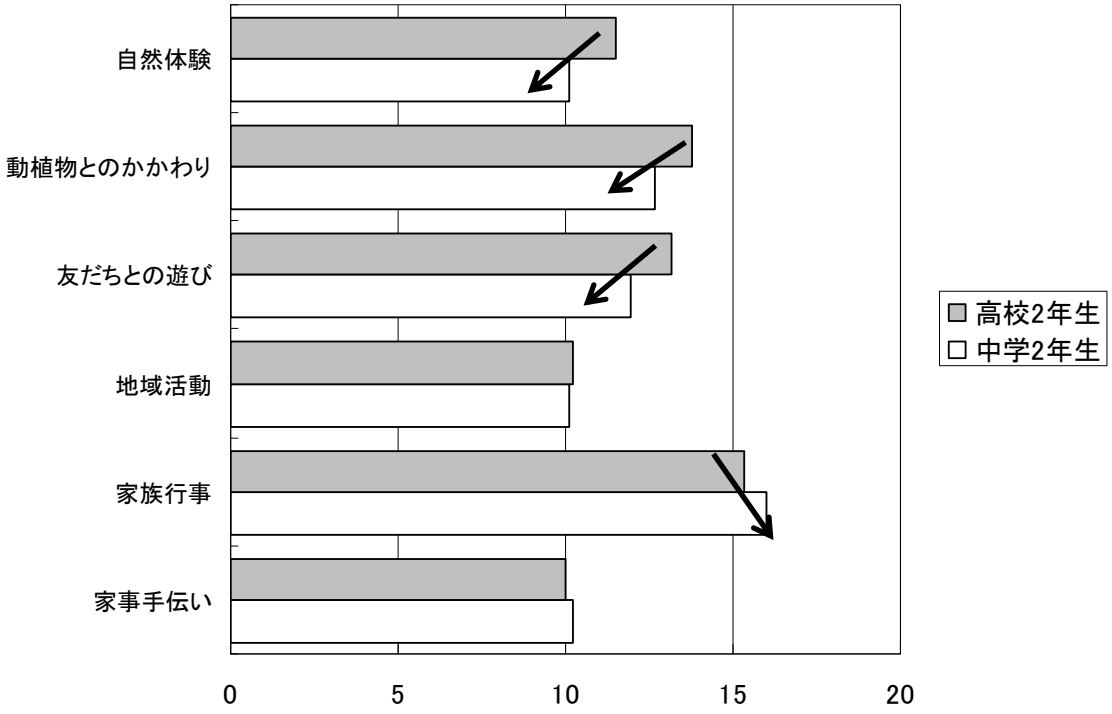


図 4-1 幼少期から小学生期までの体験の各カテゴリ別合計得点の平均[0-40 点]

【「自然体験」に関する 5 項目】
・海や川で貝を採ったり魚を釣ったりしたこと
・海や川で泳いだこと
・太陽が昇るところや沈むところを見たこと
・夜空いっぱいに輝く星をゆっくり見たこと
・湧き水や川の水を飲んだこと

【「動植物とのかかわり」に関する 5 項目】
・米や野菜などを栽培したこと
・花を育てたこと
・ペットなどの生き物を世話したこと
・チョウやトンボ，バッタなどの昆虫を捕まえたこと
・野鳥を見たり，鳴く声を聞いたこと

【「友だちとの遊び」に関する項目】
・かくれんぼや缶けりをしたこと
・ままごとやヒーローごっこをしたこと
・すもうやおしくらまんじゅうをしたこと
・友人とケンカしたこと
・弱い者いじめやケンカを注意したり，やめさせたこと

【「家族行事」に関する 5 項目】
・家族の誕生日を祝ったこと
・お墓参りしたこと
・家族の病気の看病をしたこと
・親戚，友人の家にひとりで宿泊したこと
・家族で家の大掃除をしたこと

◇ 子どもの頃の体験が豊富な大人ほど，やる気や生きがいを持っている人が多く，モラルや人間関係能力が高い人が多い。

【成人調査】

クロス集計の結果，子どもの頃の「自然体験」や「友だちとの遊び」，「地域活動」等の体験が豊富な人ほど，「経験したことのないことには何でもチャレンジしてみたい」といった「意欲・関心」や，「電車やバスに乗ったときお年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う」といった「規範意識」，「友達に相談されることがよくある」といった「人間関係能力」が高い。

経験したことのないことには何でもチャレンジしてみたい（現在）

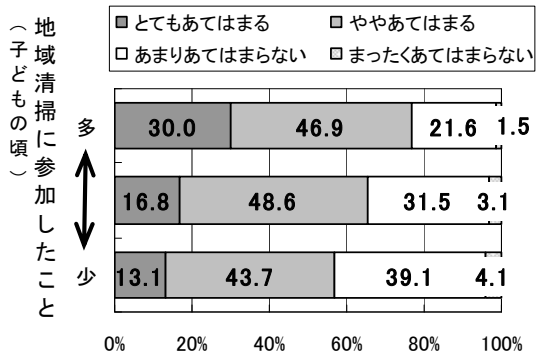


図 3-3-①-21

電車やバスに乗ったとき、お年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う（現在）

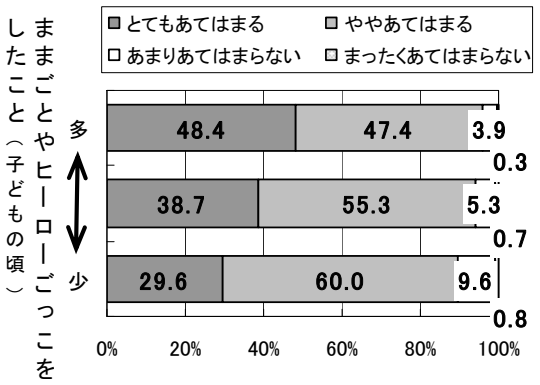


図 3-3-①-18

友達に相談されることがよくある（現在）

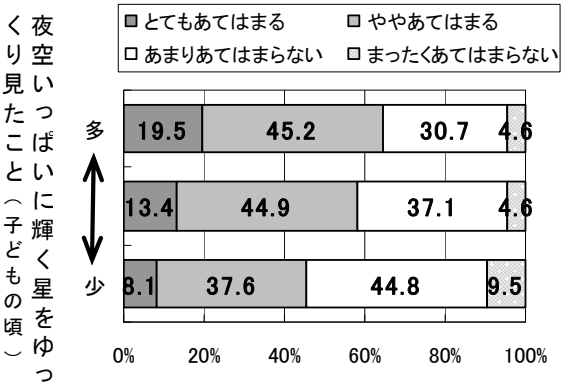


図 3-3-①-2

［意欲・関心］
- もっと深く学んでみたいことがある
- なんでも最後までやり遂げたい
- 経験したことのないことには何でもチャレンジしてみたい
- 分からないことはそのままにしないで調べたい
- いろいろな国に行ってみたい

［規範意識］
- 叱るべき時はちゃんと叱れる親が良いと思う
- 交通規則など社会のルールは守るべきだと思う
- 電車やバスの中で化粧や整髪をしても良いと思う
- 電車やバスに乗ったとき，お年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う
- 他人をいじめている人がいると，腹が立つ

［人間関係能力］
- 人前でも緊張せずに自己紹介ができる
- けんかをした友達を仲直りさせることができる
- 近所の人に挨拶ができる
- 初めて会った人とでもすぐに話ができる
- 友達に相談されることがよくある

成人調査結果②

◇ 成人の結果においても，小学校低学年までは友達や動植物とのかかわり，小学校高学年から中学生までは地域や家族とのかかわりが大切。

【成人調査】

子どもの頃の体験と「体験の力」の関係を分析（重回帰分析）した結果，小学校低学年までは「友だちとの遊び」「動植物とのかかわり」等の体験が，「体験の力」とより関係している。そして，小学校高学年から中学生までは「地域活動」「家族行事」「家事手伝い」等の体験が「体験の力」とより関係している。なお，この結果は，青少年調査と類似している(p.2)。

表 3-3-②．年齢期別「体験の力」との関係がみられる体験

体験の力	年齢期			
	小学校に通う前	小学校低学年	小学校高学年	中学校
自尊感情			地域活動	地域活動 家族行事
共生感		友だちとの遊び 動植物とのかかわり	地域活動	自然体験 地域活動 家族行事
意欲・関心		友だちとの遊び	自然体験	自然体験 地域活動
規範意識	友だちとの遊び	友だちとの遊び 動植物とのかかわり 家族行事	友だちとの遊び 家事手伝い	家族行事 家事手伝い
職業意識	友だちとの遊び	動植物とのかかわり		家族行事 家事手伝い
人間関係能力	自然体験	友だちとの遊び 動植物とのかかわり 家事手伝い	地域活動	友だちとの遊び 地域活動 家族行事 家事手伝い
文化的作法・教養		動植物とのかかわり		地域活動 家族行事 家事手伝い

◇ 関係が見られる各年齢期における体験と「体験の力」の関係についてのクロス集計結果の例

〔小学校に通う前〕

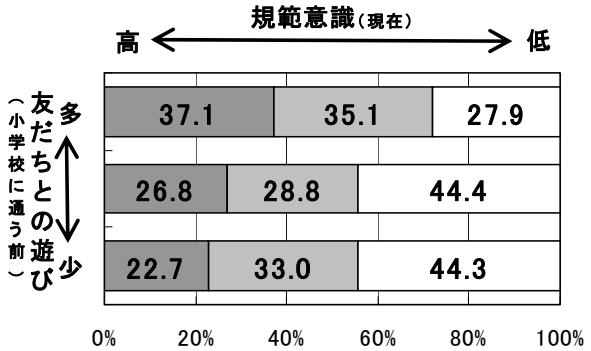


図 3-3-②-1 小学校に通う前の「友だちとの遊び」と「規範意識」の関係

〔小学校高学年〕

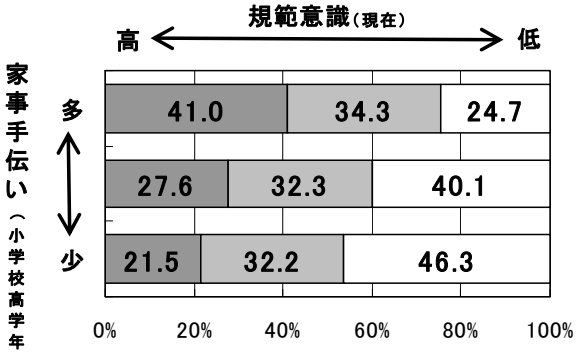


図 3-3-②-19 小学校高学年の「家事手伝い」と「規範意識」の関係

◇ 子どもの頃の体験が豊富な大人ほど，「丁寧な言葉を使うことができる」といった，日本文化としての作法・教養が高い。

【成人調査】

子どもの頃の体験が豊富な大人ほど，「丁寧な言葉を使うことができる」といった「文化的作法・教養」が高い。そして，「文化的作法・教養」5 項目は，体験の6つの各カテゴリすべてと幅広く関係している

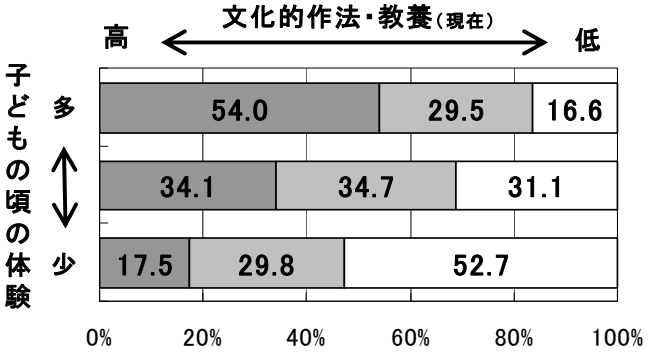


図 3-6-1. 子どもの頃の体験の多寡と「文化的作法・教養」との関係

表 3-6-1. 子どもの頃の体験と「体験の力」のカテゴリ間の関係（相関係数）

	自然体験	動植物とのかかわり	友だちとの遊び	地域活動	家族行事	家事・手伝い
自尊感情	.247**	.218**	.252**	.269**	.265**	.185**
共生感	.292**	.321**	.320**	.324**	.316**	.288**
意欲・関心	.274**	.273**	.299**	.315**	.299**	.296**
規範意識	.175**	.166**	.243**	.190**	.254**	.208**
人間関係能力	.285**	.271**	.333**	.366**	.321**	.304**
職業意識	.185**	.187**	.232**	.229**	.232**	.215**
文化的作法・教養	.304**	.314**	.332**	.346**	.377**	.329**

**p<.01

「文化的作法・教養」のカテゴリのみ，子どもの頃の体験のカテゴリそれぞれとの相関係数がすべて 0.3 以上を示す。

表 3-6-2. 子どもの頃の体験と「体験の力」のカテゴリ間の関係（相関係数上位の頻度）

	自然体験	動植物とのかかわり	友だちとの遊び	地域活動	家事手伝い	家族行事
自尊感情	4	0	8	8	2	3
共生感	4	6	5	2	4	4
意欲・関心	1	1	6	6	9	3
規範意識	0	1	8	2	6	8
人間関係能力	1	0	7	9	6	2
職業意識	0	0	7	4	9	5
文化的作法・教養	2	2	3	6	8	4

「文化的作法・教養」の 5 項目と相関係数の高い子どもの頃の体験の項目の頻度をカテゴリで数えてみると，「文化的作法・教養」を構成する項目と関係がある子どもの頃の体験の項目は 6 つすべてのカテゴリから 2 項目以上数えることができる。これは「共生感」も類似した結果が出ているが，その他のカテゴリについては，偏りがみられる。

◇ 子どもの頃の体験が豊富な大人ほど，学歴が高い・収入が多い・読む本の冊数が多い・結婚している・子どもの数が多い，という割合が高い。

【成人調査】

クロス集計の結果，子どもの頃の体験が豊富な大人ほど，最終学歴が「大学や大学院」と回答した割合が高く，その他，現在の年収が高かったり，1ヶ月に読む本の冊数が多くなる傾向がみられる。

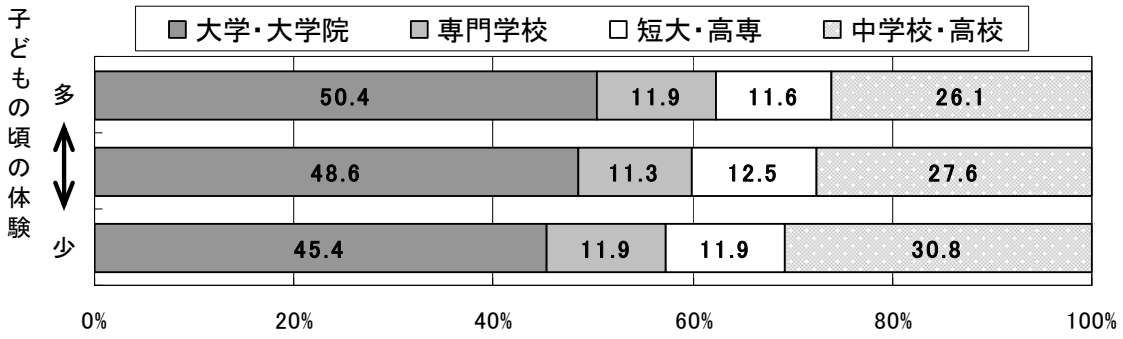
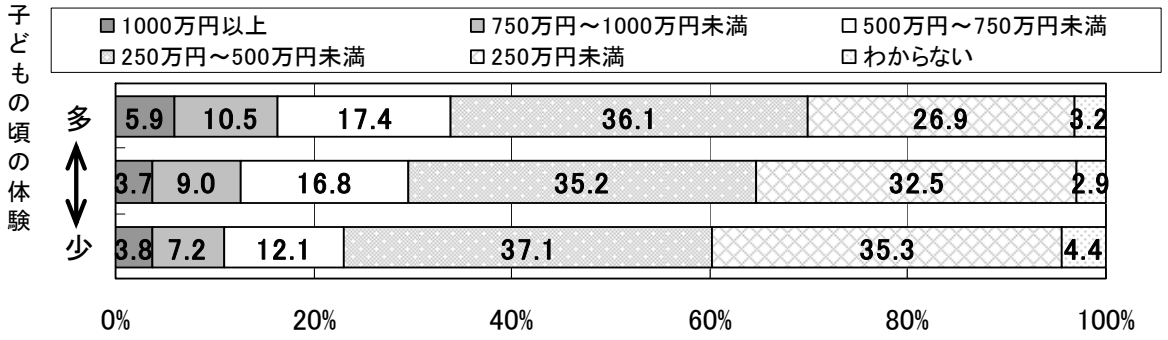


図 3-5-1. 子どもの頃の体験の多寡と「最終学歴」との関係



就業者（3,527 人）のみ

図 3-5-2. 子どもの頃の体験の多寡と「現在の年収」との関係

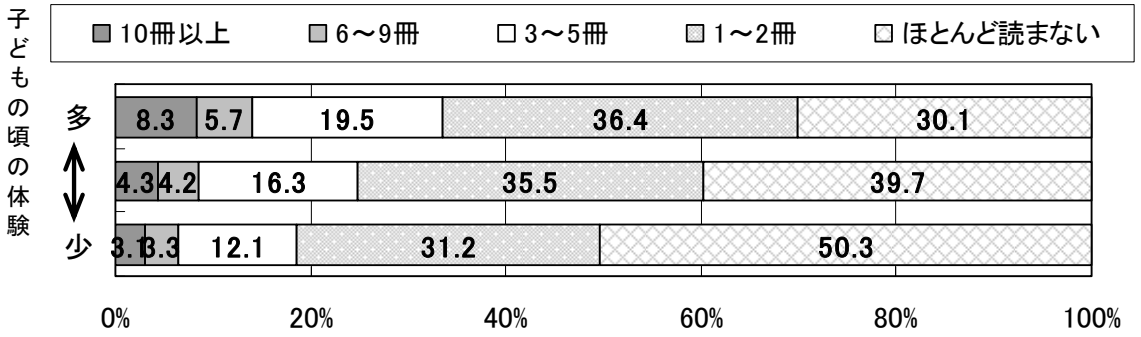


図 3-5-6. 子どもの頃の体験の多寡と「1ヶ月に読む本の冊数」との関係

【成人調査】

クロス集計の結果，子どもの頃の体験が少ない群より多い群の方が，結婚している割合が高い。さらに，子どもが 2 人以上いると回答した割合が高い。

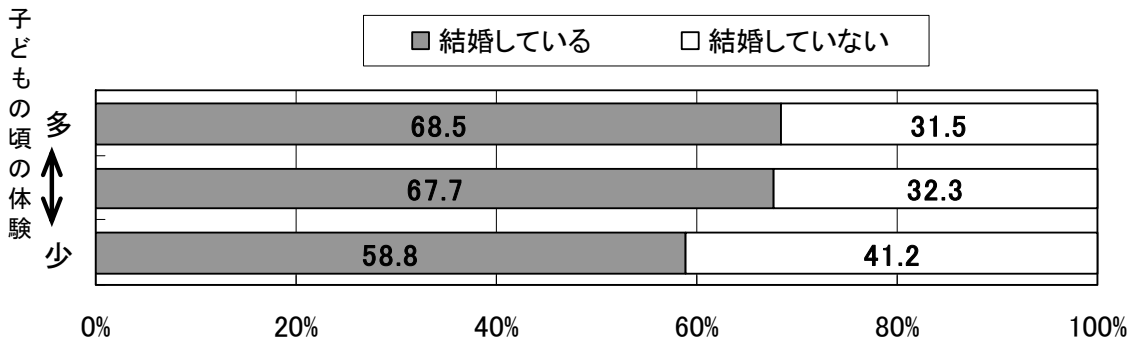


図 3-5-4. 子どもの頃の体験の多寡と「結婚の有無」との関係

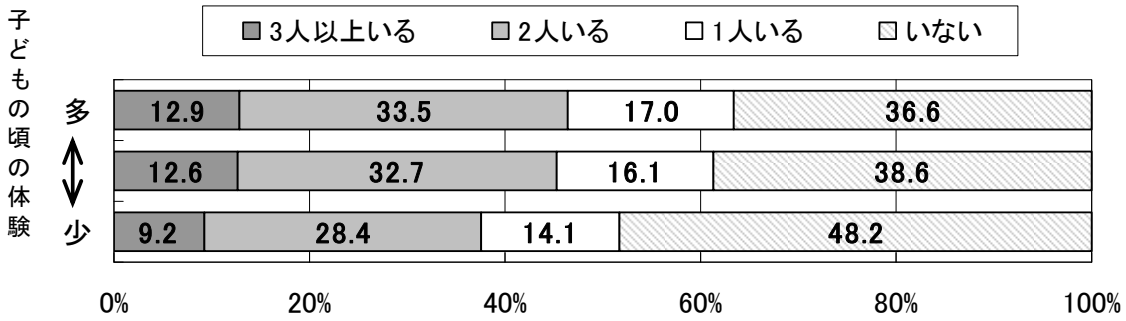


図 3-5-5. 子どもの頃の体験の多寡と「子どもの数」との関係

成人調査結果⑤

◇ 自然体験や友だちと遊ぶ機会が若い世代ほど少ない。
◇ 幼少期の家族行事の機会が若い世代ほど増えている。

【成人調査】

「夜空いっぱいに輝く星をゆっくり見たこと」といった「自然体験」，「弱い者いじめやケンカを注意したり，やめさせたこと」といった「友だちとの遊び」が若い世代ほど少ない。一方，幼少期での「家族の誕生日を祝ったこと」といった「家族行事」は若い世代ほど増えている。

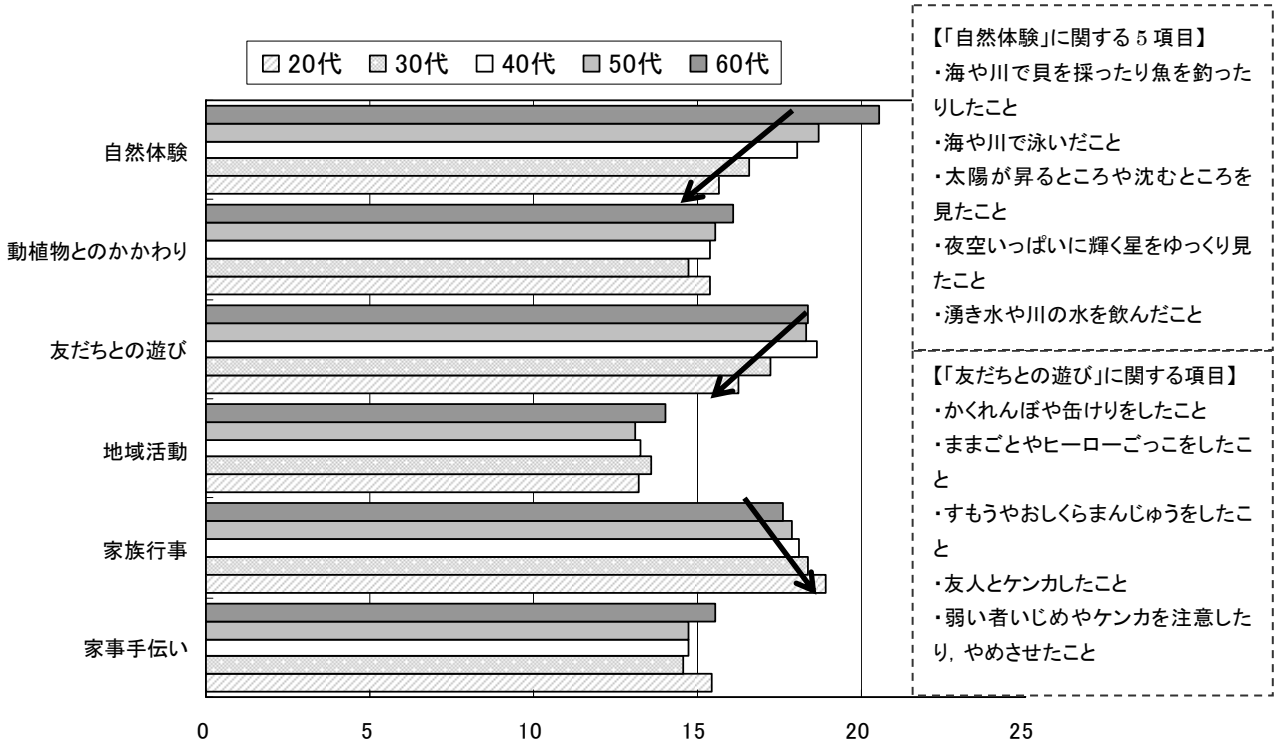


図 3-1　子どもの頃の体験の各カテゴリ別合計得点の平均[0-40 点]

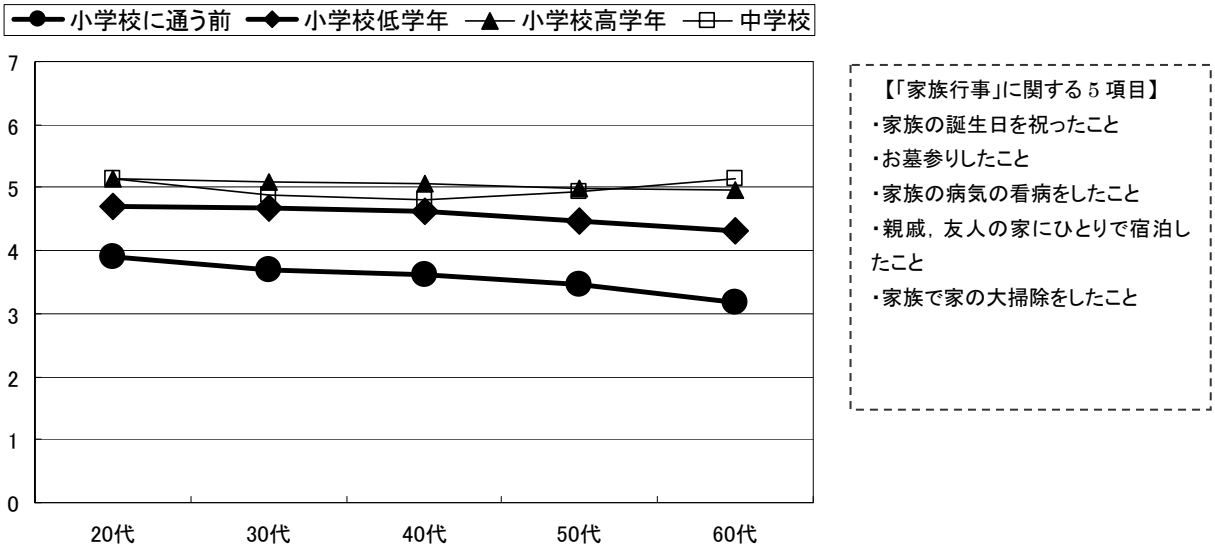


図 3-1-⑤ 「家族行事」各年齢期総得点の平均[0-10 点]

◇「規範意識」,「人間関係能力」,「職業意識」,「文化的作法・教養」は，世代が上がるほど高まる。

【成人調査】

「お年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う」といった「規範意識」,「友達に相談されることがよくある」といった「人間関係能力」,「できれば，社会や人のためになる仕事をしたいと思う」といった「職業意識」等の「体験の力」は，年代が上がるほど，得点が高くなる傾向がみられる。

「体験の力」カテゴリ:「自尊感情」,「共生感」,「意欲・関心」,「規範意識」,「人間関係能力」,「職業意識」,「文化的作法・教養」

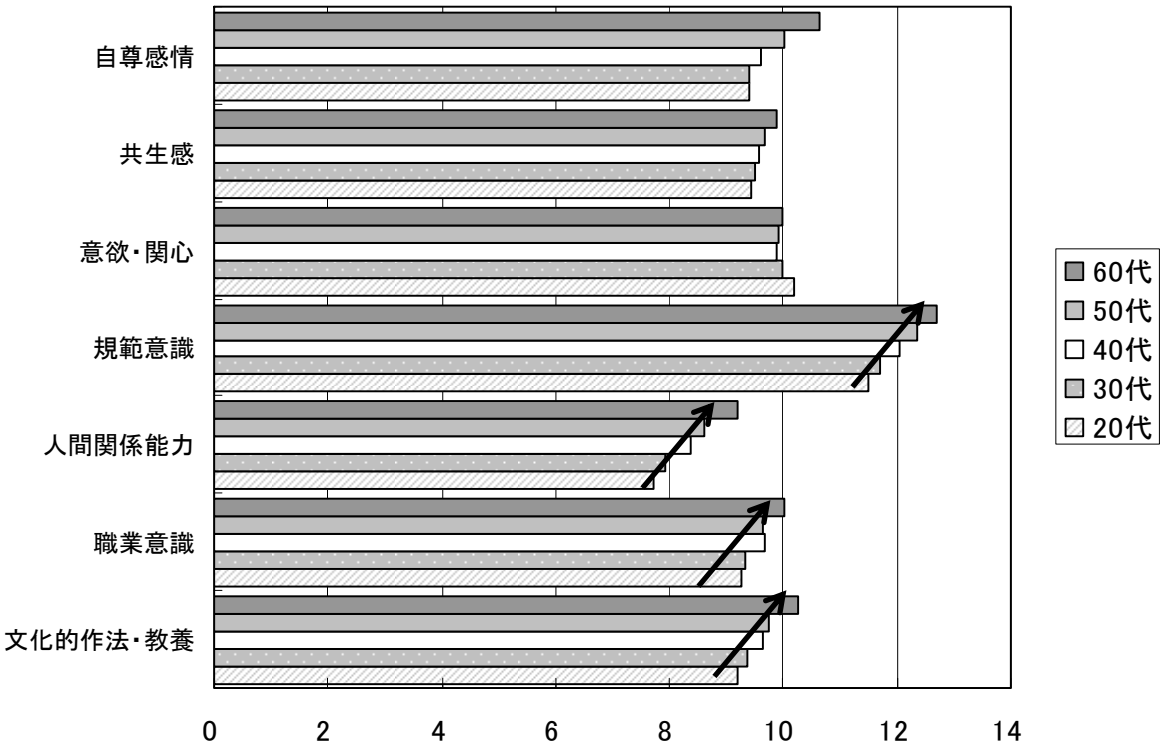


図 3-2 「子どもの頃の体験」年代別総得点の平均[0-15 点]

［規範意識］
・叱るべき時はちゃんと叱れる親が良いと思う
・交通規則など社会のルールは守るべきだと思う
・電車やバスの中で化粧や整髪をしても良いと思う
・電車やバスに乗ったとき，お年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う
・他人をいじめている人がいると，腹が立つ

［人間関係能力］
・人前でも緊張せずに自己紹介ができる
・けんかをした友達を仲直りさせることができる
・近所の人に挨拶ができる
・初めて会った人とでもすぐに話ができる
・友達に相談されることがよくある

［職業意識］
・自分にはなりたい職業や，やってみたい仕事がある
・大人になったら仕事をするべきだと思う
・できれば，社会や人のためになる仕事をしたいと思う
・お金が十分にあれば，できれば仕事はやりたくないと思う
・今が楽しければ，それでいいと思う

［文化的作法・教養］
・お盆やお彼岸にはお墓参りに行くべきだと思う
・目上や年下の人と話すときは丁寧な言葉を使うことができる
・ひな祭りや子どもの日，七夕，お月見などの年中行事が楽しみだ
・はしを上手く使うことができる
・日本の昔話を話すことができる

1. 目的

本研究は，子どもの頃の体験を通じて得られる資質・能力を検証し，人間形成にとってどの時期にどのような体験をすることが重要になるのかを明らかにすることを目的とした。

2. 特徴

⑴子どもの頃の体験と大人になった時の資質や能力の関係について検証

過去の青少年に関する調査では，現在の体験と意識・態度との関係性を検証することが中心で，子どもの頃の体験を大人になった時の資質や能力との関係について検証している調査は数少ない。そこで，本研究では，子どもの頃の体験（過去）とそれらを通じて得られる資質・能力（以下，「体験の力※」という。）（現在）の関係性を検証し，子どもの頃のどの時期にどのような体験が大人になった時の「体験の力」に関係しているのかを明らかにする。

⑵子どもの頃の体験の年代間比較を実施

20 代から 60 代の成人（5,000 人）を対象に「子どもの頃の体験」について調査し，その結果を年代間で比較することによって「子どもの頃の体験」の実施状況の推移を明らかにする。

⑶成人調査と青少年調査を同じ質問項目を用いて実施

20 代から 60 代の成人を対象とした成人調査と小学 5 年生，小学 6 年生，中学 2 年生，高校 2 年生を対象とした青少年調査を同じ項目を用いて実施し，それぞれの傾向を把握する。

⑷日本の文化に関する作法や教養に注目

過去の青少年に関する調査では，あまり注目されていなかった日本の文化における作法や教養（「お盆やお彼岸にはお墓参りに行くべきだと思う」，「日本の昔話を話すことができる」等）に関する調査項目を取り入れ，その実態を把握するとともに「子どもの頃の体験」との関係を明らかにする。

⑸各年齢期に応じた体験の提示

青少年の健全育成において体験活動の重要性が述べられつつも，これまで具体的な体験の内容や時期について明確な指標が示されてこなかった。そこで本研究では，調査研究結果をもとに，「体験の力」と相関の高い体験のカテゴリを年齢期ごとに示す。

3. 調査内容

⑴子どもの頃の各年齢期における体験

自然体験，動植物とのかかわり，友だちとの遊び，地域活動，家族行事，家事手伝い

⑵体験の力

自尊感情，共生感，意欲・関心，規範意識，人間関係能力，職業意識，文化的作法・教養

⑶葛藤場面における意識

⑷その他（最終学歴，現在の年収，1 ヶ月に読む本の冊数　等）

4. 調査方法

⑴青少年調査

① 調査対象　小学校高学年から高校生までの青少年　約 11,000 人

（内訳）小学 5 年生 2,860 人，小学 6 年生 2,830 人，中学 2 年生 2,480 人

高校 2 年生 2,844 人

（抽出）都市規模と学校規模を層化した層化二段集落抽出法

② 調査方法　学校を通した郵送法による質問紙調査

③ 調査期間　平成 21 年 11 月 27 日（金）～12 月 18 日（金）

(2)成人調査

① 調査対象 20 代～60 代の成人 5,000 人

（内訳）各年代で男女各 500 人

（抽出）ア. 回答者の居住する地域ブロックが実社会の構成比と大幅に異ならないように配慮した。

イ. 回答者の居住する都市規模が実社会の構成比と大幅に異ならないように配慮した。なお，都市規模は平成 21 年 10 月 1 日時点で市区町村を分類し，各市区町村の人口に応じて，「区部」「大市部（人口 20 万人以上）」「小市部（人口 20 万人未満）」「郡部」の4カテゴリーとする。

ウ. 性・年齢ごとに，既婚者・未婚者及び就労・未就労の割合が，実社会の構成比と大幅に異ならないように配慮した。

② 調査方法 ウェブアンケート調査

③ 調査期間 平成 21 年 11 月 13 日（金）～16 日（月）

5. 研究会

座 長 明 石 要 一（千葉大学教育学部教授）

委 員 青 山 鉄 兵（桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部助教）

岩 崎 久美子（国立教育政策研究所生涯学習政策研究部総括研究官）

金 藤 ふゆ子（常磐大学人間科学部准教授）

時 代（千葉大学教育学部客員研究員）

茅 野 敏 英（国立青少年教育振興機構客員研究員）

土 屋 隆 裕（統計数理研究所データ科学研究系調査解析グループ准教授）

（注）

※「体験の力」とは

本研究では，体験を通して得られる資質・能力について検討を行った結果，自尊感情や共生感，意欲・関心といった 7 つの要素があると仮定し，これらを総括して「体験の力」と表現している。それぞれの要素を代表する事柄は，下記に示したとおりである。

（自尊感情）自分のことが好き，家族を大切にできる 等

（共生感）休みの日は自然の中で過ごすことが好き，悲しい体験をした人の話を聞くとつらい 等

（意欲・関心）もっと深く学んでみたい，なんでも最後までやり遂げたい 等

（規範意識）叱るべき時はちゃんと叱れる親が良い，社会のルールは守るべき 等

（人間関係能力）人前でも緊張せずに自己紹介ができる，近所の人に挨拶ができる 等

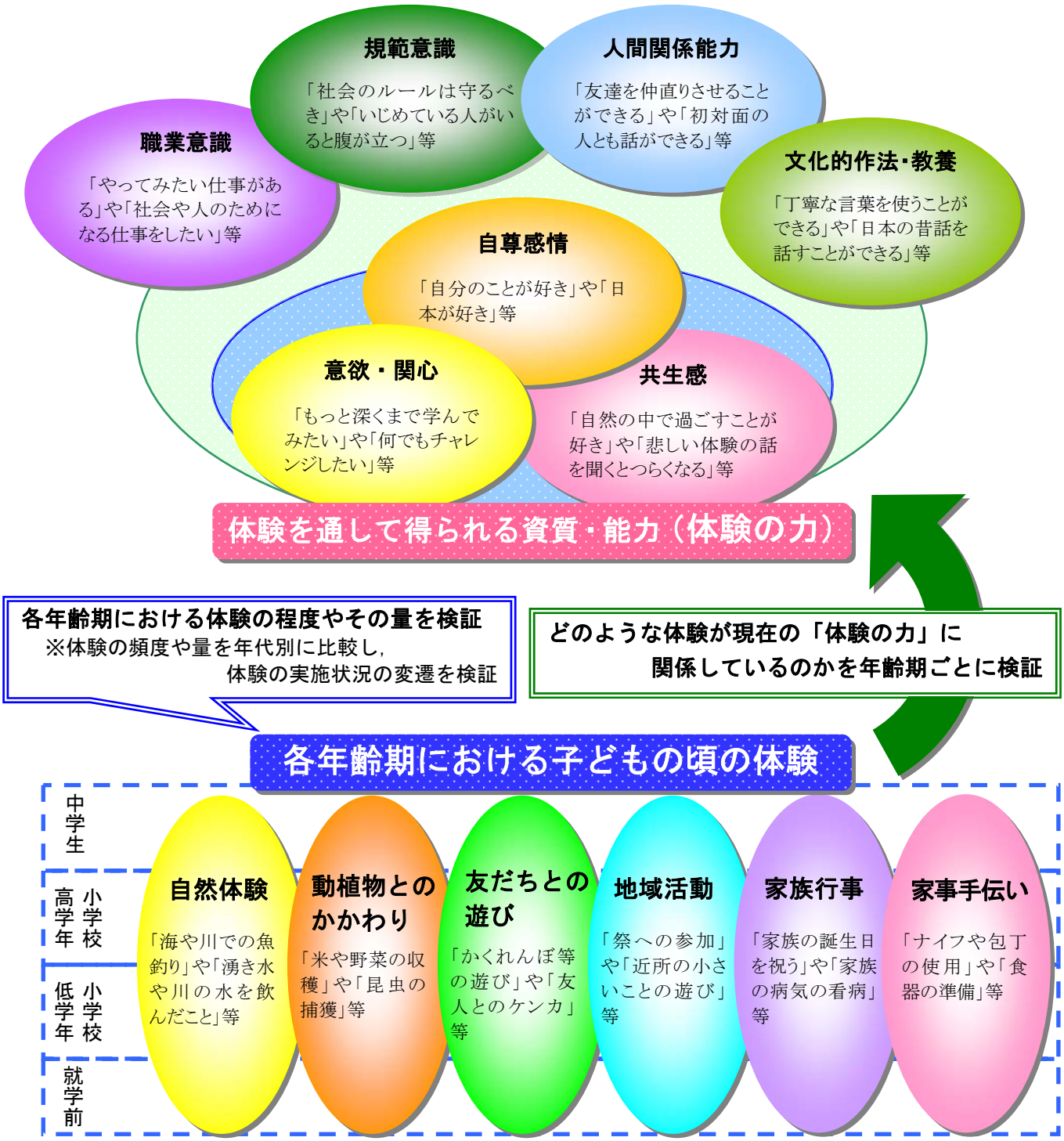
（職業意識）大人になったら仕事をするべき，社会や人のためになる仕事をしたい 等

（文化的作法・教養）お盆やお彼岸にはお墓参りに行くべき，はしを上手に使うことができる 等

各年齢期における体験と体験を通して得られる資質・能力（体験の力）の関係（イメージ図）

＜研究の目的＞

本研究は，子どもの頃の体験を通じて得られる資質・能力を検証し，人間形成にとってどの時期にどのような体験をすることが重要になるのかを明らかにすることを目的とした。



（本報告書を読むにあたって）

○ ウェブアンケート調査の対象者はインターネットの利用者に限られていることから，現在の 20 代から 60 代の全ての成人を代表する回答とは異なる可能性がある。そのため，以下の基礎集計結果を読む際は，本調査に限られた結果であるという点に留意する必要がある。
○ 本研究は，同じ調査票（一部の設問を除く）を使って，青少年調査では郵送法による調査，成人調査ではウェブアンケート調査と 2 つの手法を用いてアンケート調査を実施した。
○ 図に示している回答比率（%）は，小数点以下第 2 位を四捨五入しているため，その和が必ずしも 100.0%と一致しない場合がある。

〔子どもの頃の体験の得点化及び多寡の分類方法〕
1）各項目の回答を「何度もある」2 点，「少しある」1 点，「ほとんどない」0 点と得点化
2）各カテゴリを構成する 5 設問の得点（1 設問 0～2 点×5 設問＝0～10 点）を年齢期（小学校に通う前～中学校）ごとに合算した後，各年齢期の合計得点を合算し，カテゴリの得点を算出
3）カテゴリごとに，カテゴリの得点の平均（M）及び標準偏差（SD）を算出し，「平均+標準偏差の 2 分の 1」以上を「多」，「平均−標準偏差の 2 分の 1」以下を「少」，「多」と「少」の中間の三群に分類
子どもの頃の体験カテゴリ：「自然体験」，「動植物とのかかわり」，「友だちとの遊び」，「地域活動」，「家族行事」，「家事手伝い」

〔「体験の力」の得点化及び高低の分類方法〕
1）各項目の回答を「とてもあてはまる」3 点，「ややあてはまる」2 点，「あまりあてはまらない」1 点，「まったくあてはまらない」0 点と得点化
2）各カテゴリを構成する 5 設問の合計得点（1 設問 0～3 点×5 設問＝0～15 点）を算出
3）カテゴリごとに合計得点の平均(M)及び標準偏差(SD)を算出し，「平均+標準偏差の 2 分の 1」以上を「高」，「平均−標準偏差の 2 分の 1」以下を「低」，「高」と「低」の中間の三群に分類
「体験の力」カテゴリ：「自尊感情」，「共生感」，「意欲・関心」，「規範意識」，「人間関係能力」，「職業意識」，「文化的作法・教養」

〔重回帰分析について(p.2 及び p.8)〕
回帰分析とは，ある変数（従属変数）の値が他の変数（独立変数）を使ってどの程度予測できるかなどの問題を数量的に解析する統計的手法。独立変数が複数の場合を重回帰分析という。

主な質問項目について

1.「子どもの頃の体験」のカテゴリ及び質問項目について

□ 小学校に通う前から中学校までの 4 つの年齢期ごとに質問を設定

□ 各質問は「何度もある」,「少しある」,「ほとんどない」の 3 段階で回答

［自然体験］

・海や川で貝を採ったり，魚を釣ったりしたこと

・海や川で泳いだこと

・太陽が昇るところや沈むところを見たこと

・夜空いっぱいに輝く星をゆっくり見たこと

・湧き水や川の水を飲んだこと

［動植物とのかかわり］

・米や野菜などを栽培したこと

・花を育てたこと

・ペットなどの生き物の世話をしたこと

・チョウやトンボ，バッタなどの昆虫をつかまえたこと

・野鳥を見たり，鳴く声を聞いたこと

［友だちとの遊び］

・かくれんぼや缶けりをしたこと

・ままごとやヒーローごっこをしたこと

・すもうやおしくらまんじゅうをしたこと

・友人とケンカしたこと

・弱い者いじめやケンカを注意したり，やめさせたこと

［地域活動］

・近所の小さい子どもと遊んであげたこと

・近所の人に叱られたこと

・バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずったこと

・祭りに参加したこと

・地域清掃に参加したこと

［家族行事］

・家族の誕生日を祝ったこと

・お墓参りをしたこと

・家族の病気の看病をしたこと

・親戚，友人の家にひとりで宿泊したこと

・家族で家の大掃除をしたこと

［家事・手伝い］

・ナイフや包丁で，果物の皮をむいたり，野菜を切ったこと

・家の中の掃除や整頓を手伝ったこと

・ゴミ袋を出したり，捨てたこと

・洗濯をしたり干したりしたこと

・食器をそろえたり，片付けたりしたこと

2.「体験の力」のカテゴリ及び質問項目について

□ 各質問は「とてもあてはまる」,「ややあてはまる」,「あまりあてはまらない」,「まったくあてはまらない」の 4 段階で回答

［自尊感情］

・自分のことが好きである
・家族を大切にできる人間だと思う
・学校が好きである
・今，住んでいる町が好きである
・日本が好きである

［共生感］

・休みの日は自然の中で過ごすことが好きである
・動物園や水族館などに行くのが好きである
・悲しい体験をした人の話を聞くとつらくなる
・友達がとても幸せな体験をしたことを知ったら，私までうれしくなる
・人から無視されている人のことが心配になる

［意欲・関心］

・もっと深く学んでみたいことがある
・なんでも最後までやり遂げたい
・経験したことのないことには何でもチャレンジしてみたい
・分からないことはそのままにしないで調べたい
・いろいろな国に行ってみたい

［規範意識］

・叱るべき時はちゃんと叱れる親が良いと思う
・交通規則など社会のルールは守るべきだと思う
・電車やバスの中で化粧や整髪をしても良いと思う
・電車やバスに乗ったとき，お年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う
・他人をいじめている人がいると，腹が立つ

［人間関係能力］

・人前でも緊張せずに自己紹介ができる
・けんかをした友達を仲直りさせることができる
・近所の人に挨拶ができる
・初めて会った人とでもすぐに話ができる
・友達に相談されることがよくある

［職業意識］

・自分にはなりたい職業や，やってみたい仕事がある
・大人になったら仕事をするべきだと思う
・できれば，社会や人のためになる仕事をしたいと思う
・お金が十分にあれば，できれば仕事はやりたくないと思う
・今が楽しければ，それでいいと思う

［文化的作法・教養］

・お盆やお彼岸にはお墓参りに行くべきだと思う

・目上や年下の人と話すときは丁寧な言葉を使うことができる

・ひな祭りや子どもの日，七夕，お月見などの年中行事が楽しみだ

・はしを上手く使うことができる

・日本の昔話を話すことができる

3.「葛藤場面における意識」に関する質問項目について

□ 各質問は「a. 」又は「b. 」のどちらかを選択して回答

［自分の弱いところを見せることに対する意識］

a. 仲の良い友達には，自分の弱いところを見せてもかまわない。

b. 仲の良い友達でも，自分の弱いところは見せたくない。

［自然を破壊することに対する意識］

a. 人間の都合で自然を破壊するのはやめるべきだ。

b. 人間の生活のために自然が破壊されるのはやむをえない。

［物事をやり遂げることに対する意識］

a. がんばってもうまくいかないこともある。

b. どんなことも，あきらめずにがんばればうまくいく。

［学校の成績に対する意識］

a. 学校の成績がよいと，将来幸せになれる。

b. 学校の成績がよいことと，将来の幸せは関係ない。

［人との付き合い方に対する意識］

a. 人に対しては，いつでも正直にいる方がよい。

b. 時と場合によっては，嘘をつくこともある。

［問題解決に対する意識］

a. トラブルを抱えたときは，できるだけ自分ひとりで解決すべきだ。

b. トラブルを抱えたとき，他に頼れる人がいるなら，頼ったほうがよい。

［友達への指摘に対する意識］

a. 友達が間違っていると思えば，相手が傷つくとしても言ってあげたほうがよい。

b. 友達が間違っていると思っても，相手が傷つくことは言わないほうがよい。

［収入を得ることに対する意識］

a. 大人になったら自分の生活にかかるお金は自分が稼ぐべきだ。

b. 家族に十分な収入があれば，大人になってもお金を稼ぐ必要はない。

［家族と過ごす時間に対する意識］

a. 仕事のためなら，家族で一緒に過ごす時間が減ってもやむをえない。

b. 仕事のために，家族で一緒に過ごす時間を減らすべきではない。

［海外生活に対する意識］

a. 今後もできるだけ日本で生活していきたい。

b. 今後，できれば日本以外の国で生活したい。